

一枚の写真 (その2)

——メタ・テキストとしての——

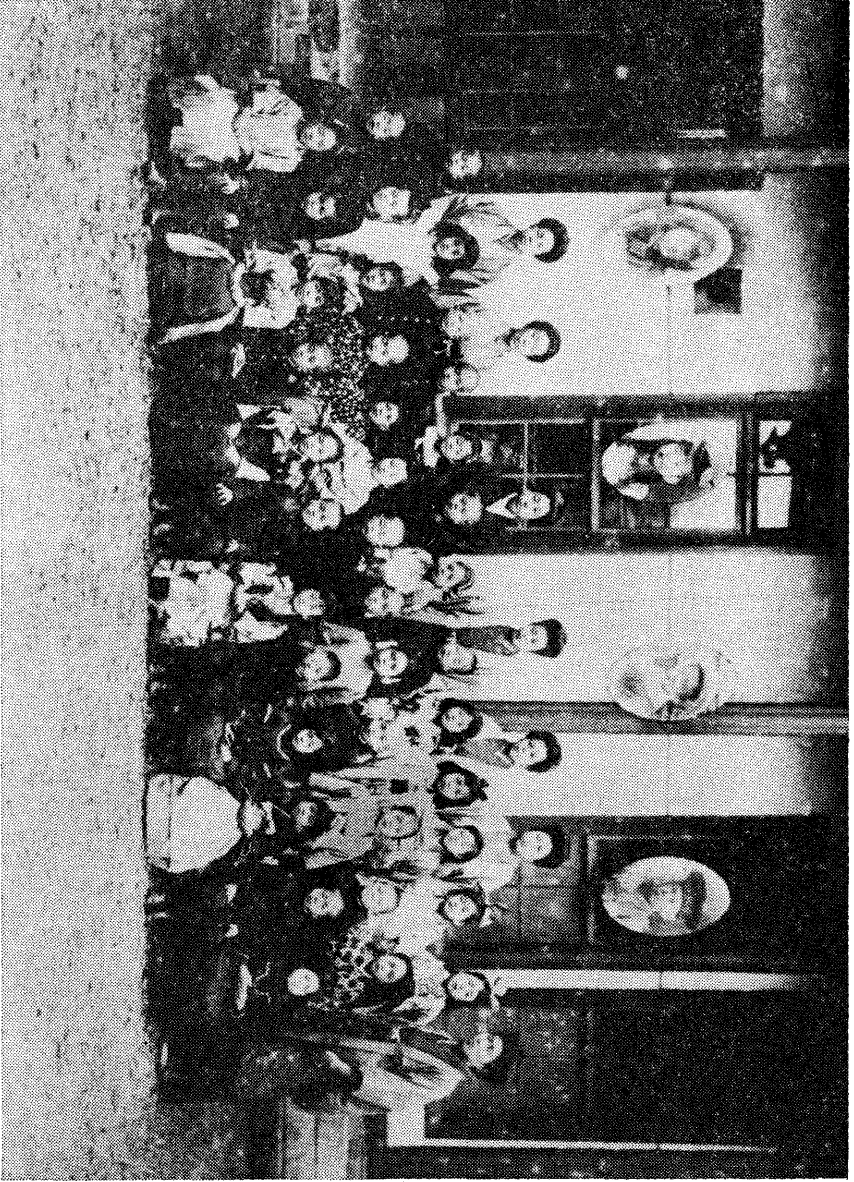
本田 和子

幼い日を記念する一枚の写真は、その人にとって、過去という薄霞の中にしほしの旅を可能にする、開かれた窓である。然し、同時に、それは、単なる個人の生育史の一齣であることを超えて、子どもに託された「人々のまなざし」を指し示し、「時代の想い」の証人となる。たかだか、何平方糧の空間の中に、子どもらの衣服、家具や敷物、或いは背景に選ばれた建築物などの形で、その時代が凝縮され、子らへの想いが呼吸づいているのだ。

私は、先に、明治十五年のお茶の水幼稚園の記念写真を手掛かりにして、当時の園児たちを支えた生の文脈を読み解くことを

試みた。^{*1} すなわち、コロニアルスタイルの園舎が近代を象徴し、附属幼稚園もまた、文明開化のモニュメントの意味になったこと、にもかかわらず、素朴で土くさい子どもらの表情が物語るのは、山の手上流の子女たる彼らの生活が、未だ都市化の洗礼を受けず、地方武士の習俗を伝えるかのような、鄙びたものであったらしいこと、などを……。

時代は、三十年を経過する。前回も、比較対照の資料として掲載したが、写真(2)は、大正二年の卒業式風景である。この一枚の写真は、私どもに、何を語りかけてくれるだろうか。



▲ 写真 (2)

◆ 詰衿服の男児たち

先ず、目に著しいのは、勢揃いした男児たちの学童服姿である。十八名中、三名を除くだけで、全員が丸坊主の黒の詰衿服である。女兒の洋服姿が、数名に過ぎないのに比すとき、これは明きらかに、読み解きを必要とする一つの「徴」ではないか。

ところで、服装史が描き出すのは、日清、日露の兩戦役後、学帽、紺緋筒袖の小中学生男児スタイルが定着すること、或いは、第一次大戦後に、男児の洋服が漸増すること、などである。例えば、明治三十一年二月十六日の「都の華」は、「都下にて小学校へ通ふ程の年頃なる子供即ち十歳より十四歳ぐらゐまでの服装を見るに学校へ往くと往かざるとに拘はらず男児は筒袖が大流行にて筒袖着ざるは何となく芸人の子供らしく不活潑に見えて友達仲間にも勢力なきやうなり」と、当時の子ども風俗を伝える。一方、大正十年一月十四日の「読売新聞」は、「子供服の需要は近頃めつきりと殖へて、四十二年頃子供服を試みに売り出した時は、月に、五、六着位の注文で、実用品とならずに居たのが、昨年冬の冬など、日に、四、五千円宛子供服で売り上げがある」という記事を載せている。

いずれも、幼児服に関する言及ではないが、それにしても、写

真(2)は、この二つの記事のほぼ中間に位置すると見てよい。そして、附属幼稚園児の戸外遊びを撮影した大正五年の写真は、男児ともに和装であり、子どもの日常着としては、未だ、和服が主流であったことを裏付けている。僅かに、欧化を象徴するのは、真白で大ぶりの洋風エプロンであるか。洋風エプロンは、明治後期から、婦人雑誌などに、しきりに紹介され、たつぷりとよせられたギャザーやフリルによって、必ずしも実用とのみは言い難い、その性格をあらわにしている。

こう見てくると、勢揃いした学童服姿は、やはり、卒業式と結びついた特別の、とりわけ、男の子たちと関係の深い「徴」とみなすべきであろう。先ず考えられるのは、幼稚園の退園が、みんな一緒に卒園するという形の学校暦として定着し、しかも、それが、「卒業式」という「儀礼的な時間」として結晶化したこと、特に、それが、男児たちにとっては、一種のイニシエーションとして機能したと言うことである。

教育施設への出入りが、同一年齢に限られ、ある一日を定め一斉に行なわれる。そして、それ以外には、自由な入退学が認められない。こんな閉鎖的な学校暦が確立され、子どもたちの生活を拘束するようになったのは、わが国の場合は、近代義務教育以降の出来事であろう。

幕藩体制下の藩費や寺子屋の入退学は、年齢も時期も、大凡、それぞれの個人に即していた。藩費の入学年齢は、七、八歳以上であれば別に制限はなく、時には五歳の者が混っていたと言う。退学は、二十歳前後が多かったが、藩によっては、現職中は必ず在学するという方針を採ったから、四十歳すぎても塾生として勉学を続ける者もあったらしい。個人学習たる素読から講義を経て、集団学習たる会説、輪講へと、学習の順序が定められていたため、一人々々、ばらばらに入学してきても、格別の支障は生じなかった。

寺子屋は、八、九歳で寺入りして、ほぼ五年でいとど在籍して教授を受けるのが一般であったと言う。ただし、それぞれの子どもの入学が、その子どもと家族の事情によって決定されたとしても、それが、成長の一つの節として重要視されたことは確かからしく、赤飯を炊いて師家に納め、もよりの天満宮に詣でるなど、「寺入り」にまつわる様々な儀礼が、それを証している。

こうして、その進退が個人と家族の側に属していた初等教育が、国家的規模により、一斉に庶民の子弟をからめとる形で展開されたのが、近代義務教育の施行であった。そして、その規則は、より幼い子どもたちをも拘束する。すなわち、一斉に小学校へ入るためには、一斉に幼稚園を出ていかねばならないのだ。

写真に見られる男児の詰衿服姿は、現実的には、小学校の校服の先取りであろう。と同時に、それは、いまここに顔を並べている男児たちが、そのまま一斉に小学校へ進学するという人生コースが、疑う余地もない自明の理として大人たちの意識を支配していることの証である。それはまた、幼稚園卒業即小学校入学という進路が、あらがい難く子どもらを呪縛していることを物語る。学制頒布後、約四十年の間に、全員就学、とりわけ、男児皆学の経路が、かくも徹底的に国民感情を統制した「徴」を、ここに読むことが出来よう。因みに、明治十五年（写真(1)の時期）には、五十パーセントに満たなかった就学率が、大正期に入ると、九十パーセントに達している。

◆ 除去されたヴェランダ

背景に選ばれた園舎には、例の手すりが見られない。これは、創設当初の園舎が、明治十七年九月の暴風雨によって破損し、十九年三月以降、再築された新園舎が使用されたことによる。新園舎は、総坪数は前園舎とほぼ同じであったものの、様式は、「コの字型片廊下」の和洋折衷形式となり、³ヴェランダをめぐらしたコロシアルスタイルは、早々に退けられた。以後、この

園舎が、大正十二年まで、使用されることになる。

教育の近代化を象徴する附属園舎が、僅か十年の耐用年数しか持ち得ず、改築を余儀なくされたとは、建築史的に見て、興味ある出来事に相違ない。

開化の記号であり、国家なるものを見る形で内外に喧伝すべく、十八万の国費と外交関係者たちの情熱が注がれたとされる鹿鳴館建築もまた、明治二十七年の地震で大損な被害を蒙り、全面的な補修を余儀なくされている。十六年の竣工後、十年余の出来事であった。しかも、それ以前から、階上の舞踏室がグラ／＼ゆらくと言う、利用者たちの不安の声があったとのことだ。⁴

とすれば、当時「欧風建築の粹」と見られたそれらは、その実、極めて脆弱な、日本の風土にふさわしからぬものだったのであるうか。鹿鳴館建設に当っては、設計者コンドルと、外務卿井上馨との間で、しば／＼見解の相違があり、結果として、様々な様式も加わって、コンドルを苦悩させたと伝えられている。⁵ 附属園舎に関しても、「見るからに西洋風に」と望む為政者の思わく

と、工法その他で未だ不足をかこつ建築施行者との間に、密やかな葛藤を想像するとしても、強ち、不当とのみは言えまい。いづれにせよ、秋の台風で屋根は飛ばされ、使用に堪えないほどの損害を蒙ったのであった。

そして、再築された新園舎は、もう、手すりもヴェランダを必要としてはいない。その頃までに、工部大学校講堂、築地訓練院、上野帝室博物館などと、欧風建築も漸増し、さらに、十六年には、先に触れたように、華麗な開化の記号たる鹿鳴館も竣工している。幼稚園舎になわれていた開化の尖兵たる役割は消えて、慎ましく、本来の目的が呼び戻されたと言ふことだろうか。

ところで、前園舎のヴェランダは、日本家屋の縁側にも似て、子どもたちにとっては、恐らく、遊び場であったに相違ない。然し、管理者や教師の側から見れば、内と外の境界に位置する吹きさらしのこの空間は、部屋とも通路とも分類し難く、取り扱いはくい厄介な場所であったろう。従って、改築時に除去されたいきさつを通して、大人たちの管理意識が、子どもの遊び空間を追究していく姿を読むことも可能である。いづれにせよ、こうして作り上げられた附属園舎は、昭和戦前期まで、幼稚園建築の典型とみなされ、⁶ 全国の範とされたのであった。

◆都市の子ども、子どもの都市

大正二年の写真は、子どもたちの相貌の変化を浮き彫りにする。はっきりした造作、中心部に向かってきりっと集中した目鼻

だが、彼らの表情を、大人びた恰利なものに見せる。明治十五年の写真に見られたあの鄙びた面ざしは、どこを探しても見出せない。

この三十年間、東京の都市化への歩みは目覚ましかった。園児たちの生活の拠点たる本郷湯島周辺も、例外ではない。一つの指標として、木造家屋の増加状態を例にとろう。本郷区の場合、明治十九年に四、〇〇五戸、同二十八年に一一、六三八戸、大正四年には二〇、〇二五戸と増加の一途をたどる。小石川区は、十九年五、六六二戸、二十八年九、三四四戸、そして大正四年は二〇、九三三戸である。四谷、牛込など、園児たちの通園圏と考えられる各区の場合も、ほぼ同様の傾向が見出される。他方、日本橋、京橋、神田などの家屋増は、明治中期或いは末期にはピークに達し、以後漸減の傾向を示す。これは、これら地域が商業地のため、大会社や大商店が出現して、住居などの小家屋が整理されていく過程である。これと対比して、山の手地区の小家屋の増加は、住宅地の開発と、給料生活者の急増に見合う出来事なのだ。従って、山の手人種たる附属幼稚園児の生活の周囲には、日々住宅が建設され、人口が増加していく都会が、呼吸づいていたのである。

子どもらの生活を変えたのは、人口の密度だけではない。東京の夜は、明治末期から大正にかけて、急速度で明かるさを増し

た。東京電燈会社の設立認可は、明治十六年であるが、当時の燈火は、ランプへの依存度が高い。例えば、東京市内の街燈基数を対照すると、明治三十三年の数字で、ランプ五六三九一、ガス一八七、電燈は僅かに二六一に過ぎない。開化の象徴たるガス街燈すら、容易にランプ街燈を凌駕し得ないのだ。然し、興味深いのは、各家庭の場合、引用戸数では、ガスにも及ばない電燈が、引用燈数においては、はやくとガスを追い越していることである。明治三十八年の資料では、ガス燈は一戸あたり四燈でいどであるのに、電燈は、既に八燈に達していた。そして、明治四十五年には、ガス燈と電燈の引用戸数そのものが逆転する。四十年十二月に駒橋発電所が竣功し、遠距離送電が可能になったことも、恐らく、電燈の普及に拍車をかけたに相違ない。

電燈は、ランプのように、給油やホヤ磨きの手間もかからず、ガス燈のように点火の手数も不要である。しかも、家中のあちこち、先の資料によれば八箇所にも設置することが出来、すみぐまで明かるくしてくれる。これは、夜のイメージを大幅に変え、人々の、もちろん子どもをも含めて、時間意識を変貌させる出来事であった。

かつて、子どもたちは、夕闇が迫り、ものの形がおぼろになると、遊びを止めて家に入り、魂を奪い取る漆黒の闇を恐れなが

ら、母たちにすがりついて夜を眠った。顔は見えぬながらも、同じ寢具の中に手を伸ばせば届く母や乳母、それを身体で確かめつつ、彼らの暗い夜は、安らかに経過したのである。

然し、簡便な燈火の普及は、子どもらを大人の、夜の時間を隔てた。母たちは、かつては寢所にこもることが自然であった夜の時間を、昼の営みの延長として用い始め、子どもらを寢所に送りこむことで燈火の輝く夜を、己れらの時間として徴づけたのだ。

子どもたちに、不安な一人寝を強いたのは、単に、西欧育児思想の影響だけではあるまい。家々の夜が明かるくなるとき、子どもらの夜は、不安と孤独に変貌したと言うなら、余りにも逆説にすぎらうか。

交通機関の発達も、子どもらの近辺を騒がせた。明治三十六年から、東京電車鉄道、東京市街鉄道の両社によって、半ば競争のような形で開発の急がれていた市街電車が、三十七年一月には、園児たちの極く身近に、網の目を広げてくる。昌平橋―本郷三丁目間の本郷線の開通がそれである。四十四年、東京市の買収により、市営電気軌道が開業されるが、その頃、一日の平均乗客数は、六十万に及ぼうとしていた。¹⁰

四十三年三月二十三日の「二六新聞」は、「どの車輛も悉く満員にして起点に近き停留場にて乗客する者は、幸に乗り得ると雖

も、中途の停留所にて乗らんとする者は死物狂となるにあらずんば大概は乗車し得ず」と報じて、今日の通勤ラッシュと同様の光景を記録している。

もちろん、園児たちが、こんなラッシュ時に、市電を利用したなどと言うつもりはない。然し、こうして、めまぐるしく変貌する、しかも殺伐な生活のたたずまいの中で、彼らの感性が過度に刺激され、神経質で早熟な育ち方が促進されたとは、充分に肯定し得ることであろう。さらに言うなら、木材や土器に代って、生活の中に進出してくるガラスやアルミニウム、砂糖の消費増や嗜好品の普及など、子どもの感性に影響したであろう消費財の変動は、枚挙にいとまがないほどなのだ。都市化と共に、大衆の中に位置を占めた様々な「ものたち」は、すべて、子どもたちを刺激し、いわゆる神経の細かな「都会っ子らしさ」を作り上げるべく機能したと言えよう。

近代都市なるものが、生産に直結しない人口を大量に抱えこみ、巨大な消費空間を膨張させる一面を持つとするなら、その消費性と、それゆえの不安定性を、真向から引き受ける存在が子どもなのではないか。一枚の写真が示す表情の変化は、私どもの前に、「子どもにとって、都市とは何であるのか」を、如実に物語る視覚記号なのである。

* 1 「一枚の写真」(本田和子「幼児の教育」80・4、昭56・4)

* 2 「近代日本服装史」(昭和女子大学被服学研究室、昭51)

* 3、6 「幼稚園施設のあゆみ」(菅野誠「幼児の教育」79・9、昭55・9)

* 4、5 「鹿鳴館貴婦人考」(近藤富枝、講談社、昭55)

* 7、8、9、10 「明治文化史12生活篇」(渋沢敬三編、原書房、昭54)

